

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	序
Sub Title	
Author	十時, 巖周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1983
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.56, No.3 (1983. 3) ,p.5- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	内山正熊教授退職記念論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19830328--005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

内山正熊教授は昭和五八年三月をもつて法学部を定年退職されることになった。法学部助手に就任された昭和一八年一月以来、在職の期間は約四〇年の長きに及ぶ。前大戦末に就任された先生は、学部の中戦後の歴史を自ら体験された最後の専任者である。そして、今日、政治学科の専任者の多くは、先生の講義を受講したことのある「教え子」でもある。筆者も、また、先生が助教授になられた頃、先生の『西洋外交史』を受講したことのある学生の一人である。

内山先生は、当時から、正義感の強い徹底した理想主義者である、と学生たちから思われていた。昭和二〇年代後半の思想的状況のもとで、先生は、また、反戦・平和主義の鮮明な旗手の一人である、と学生たちから信じられていた。事実、反戦・平和主義者としての先生は、その後、六〇年安保の激動期にも、さらに昭和四〇年代大学紛争の動乱期にも、終始一貫、いささかもたじろがれるところがなかった。特に、大学紛争解決のための対策委員会における先生の主張と行動は、他の専任者のそれとは異つて、ひととき異彩を放っていた。そして今日もなお、先生は透徹した理想主義・平和主義の献身的な使徒であられる。

昨年十二月上旬、内山先生の研究会卒業生の会合に出席する機会をもつた。研究会出身・塾員総数六一八名、当日の在京

出席者三百数十名の盛会であつた。先生が教授になられてから既に三〇年になるが、その間の英国留学の二年間を除き二八回の研究会出身者総数が六百名を超えることは、法学部の研究会のなかでも異色の存在であるように思われる。先生の強い信念である「入会希望者は原則として全員研究会に入会させる」という三〇年間に及ぶ実績がそうさせたのであろう。研究会学生数の適正規模については議論の分かれるところであるが、先生の研究会のように、徹底した『理想主義』によつて運営されてきた研究会は、法学部のなかでも異例のことといえよう。研究会卒業生の先生ご夫妻を敬愛して止まない情景は感動的でした。

先生は、定年ご退職後伊勢の松阪大学に就任されることが決定している。その決定のプロセスで、先生は、まず第一に、他の大学のすべての兼職を辞退し全力をあげて新しい任務に邁進すること、そして第二に、その目標達成のために住居を鎌倉から松阪に移すことを決心されたようである。ここにも、先生の面目躍如たるものがある。なにごとにも、誠心誠意、全力を尽しことに当らなければ気がすまない先生のご性格がみられる。このような先生のお人柄に心から敬意を表しつつも、法学部ならびに大学院法学研究科としては、ご退職後の先生に是非ともご担当いただくかなければならない講義があつて、いくたびか先生と強談判をしなければならぬ立場に立たされた。そして、苦心の末に、どうやら大学院博士課程週一コマのご協力をいただくことができるようになった。最近の出来事である。

これ迄にも、先生からは、学部の最長老教授として学部学事の運用にしばしば懇切なるご指導をたまわつてきた。ときには学部常任委員会委員として、あるいは人事委員会委員として、さらには法学研究編集委員会委員長として、激しい議論を個人的にしていたこともあつたが、つねに徹底してご議論いただいた。中途半端な妥協は先生のもつとも忌み嫌はられるところであつた。先生の日頃のお人柄により筆者も安心して議論を続けることができた。そして、一旦議論が終了する

と、先生は、いつも晴れやかな表情で後輩の筆者を激励し慰めて下さるのがつねであつた。このような先生のご好意にたいしては、いまもなお、心から感謝しないではおられない。

良き師よき先輩がまたお一人三田山上から去つていかれる。寂莫とした感に耐えない。

ご退職後もますますご壮健でご活躍下さるよう祈つて止まない。

昭和五八年二月

法学部長 十時 巖 周